

戦（いくさ）と向かい合う【その2】 ～『平家物語』を中心に、今と昔の戦の比べ読みを通して 戦争と向き合うことで命を見つめ、 伝える言葉の力を実感し合う学習指導（中学2年）

松原 洋子

一見平和な日常生活の中では、生徒は「言葉の力」を実感する機会があまりない。戦後70年を迎えた今、極限状態の「戦争」の中であって、人はどのように自分や大切な人の命を見つめ、どのように思いを伝えたのか。そこにどのような「言葉の力」があるかを意識して読み取らせることは、「言葉の力」の影響を実感できる機会となる。特に800年前の『平家物語』の世界と70年前に終わった太平洋戦争のもとで戦いに巻き込まれた数多くの方々の思いを、たくさんの教材の開発や設置によって比べ読みさせることと、学び合いの場を教師が提供することで、学習集団の意欲は高まり、思考は深まったり広がったりした。

[キーワード] 戦争 平和教材 言葉の力 命 生死 メメント・モリ 比べ読み 古典

1 はじめに ～戦（いくさ）をどのようにとらえ、どのように教材とするか～

後述の「単元設定の理由」でも述べるが、日本は2015年に戦後70年を迎えた。この間、日本は奇跡的に平和を保つことができていた。しかし、現在を生きる若者には、その平和の価値を実感できていないように見えるし、日常生活においては軽々しく「死ね」という言葉を使い、命を軽く見る傾向も見える。

今回は、敢えて戦争を舞台にした文章を読む。しかも、800年前の戦を舞台にした古典である『平家物語』と70年前に終わった日本の戦争とを重ねながら読むのである。国語科として身につけさせたいのは「言葉の力」であるが、一見平和な現代よりも、戦争という極限状態の中のほうが、人々がどのように自分や大切な人の命を見つめ、どのように思いを伝えようとしたのか、そこにどのような「言葉の力」があるか、を見いだせやすくと考えた。そしてまた2つの戦いを重ねて教材化することにより、時代とともに価値観は変化していくものではあるが、何百年たっても変化しない人間の思いが「言葉の力」とともにあることにも気づかせたいと考えたのである。

1.1. 戦争への認識 戦争に関する学習者の実態

中学2年生という学習者たちは、平和な世界に生き、戦争によって死を恐れる不安もないままに生きている。世界にはたくさんの戦争が溢れているが、それらは多くの者にとってニュースのひとつに過ぎない。70年前までこの日本も戦時下にあったが、それを想像させるものは少ない。戦争の生き証人の方々はまだご存命ではあるが、年々少なくなり、また戦争を語ることを諦めてしまった方々も多い。

学習者の身の回りにも、戦争を語る方は少ないと思われる。たとえ戦争体験者ではあっても、祖父母の世代が既に、戦時中を子どもとして生きていたため、断片的記憶しかないという方も多いのである。

学習者は明るく素直である。指導者が提示した課題に対しては素直に取り組む。しかし、こと戦争（戦さ）に対しては、ある種の拒否感あるいは無関心さがある。彼らのイメージする戦いは、近代的兵器・ロボットが登場し、自らは決して死傷しないゲーム的なものである。あるいは小学校までの学びの中で、食糧不足の苦しみや広島・長崎の被ばくの苦しみについて知識としては持っているが、それらをわがことのように感じる感性や思いやりについてはまだ表面的である。

平和教材を持ちだしたとたんに、「はいはい、戦争はやっちゃいけないでしょ。戦争は残酷。戦争しない世の中を作らなくちゃいけないでしょ。」と、今までの学びの中で常に「結論」とされたことを持ち出した学習者がいた。この発言は、いかにこれまでの学習が表面的なところ、あるいは広がりがない限定的な世界の中でなされてきたかを示している。

国語科の学びの中で戦争を扱うにあたり、戦時下を必死に生きた方々が、どんな思いで自分あるいはまわりの大切な人の命を見つめ、さらにそれをどのような言葉で表現したのか、そこにどんな言葉の力があつたのか、という点にまで、学習者の思考を深めたり広げたりしたいと考えている。そのためには、教材が学習者の心の中にまで響くものでなければならない。教材の選択・教材開発・教材の配置などにまで、指導者は意識を広げていく必要がある。

2. 実践の概要（対象 中学2年生）

※（本学の特別開発研究プロジェクト研究にもとづく実践研究 第2年次発表を兼ねています。）

2.1 単元の目標

(1) 育成を目指す言語能力

- ・同じテーマについて書かれた古文や現代文を比べ読みすることで、人間としての生き方について考え、自分の意見を持つことのできる能力と態度（「C読むこと」指導事項エ・オ）
- ・古文の表現の仕方や特徴に注意し、古文に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像して読むことのできる能力と態度（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」指導事項ア（イ））

(2) 単元の目標

- ①さまざまな文種の文章を重ね読みし、それぞれの作品を読み味わうとともに、共通するキーワードやテーマをつないで思考を深める。
- ②文学・説明文・古文それぞれの文章に使われている独特の表現や文章構成を意識して読み、日本語への関心を深めるとともに、それらを自分の文章表現にもいかそうとする意欲を持つ。

2.2 単元設定の理由

(1) 単元全体から見て

現代の学習者をとりまく状況は、大変複雑である。命が軽視されている時代ともいえる。なくならない戦争・赤の他人による突然の不条理な殺人・少年犯罪（殺人）や虐待死・責任感の欠如から生まれた人災による死・経済的に恵まれつつも迎える孤独な死・インターネット自殺・TVゲームや漫画などに多発する、人の命が粗末に扱われる場面・子供に蔓延する「死ね!」という言葉・核家族化などが進み、老いや死を身近に感じられなくなっている現在……。

戦争が終わり、経済的に豊かになり、寿命ものびた。にもかかわらず、充実し満足した生き方ができずに苦しんでいる人は多い。死は人生の着地点であるにもかかわらず、日本ではこれまで死はタブー視されてきた。なんとなく今を生きているだけで、将来の夢も抱けない人を見るにつけ、ここで改めて、死の意味を考えさせることは意味があると思われる。特に5年前の東日本大震災においては、地震・津波などによるたくさんの「死」が報道された。また、外国では不気味なテロにより、多くの方々が巻き添えになっている。まさに学習者にとっても、今や「死」と無縁の生活ではなくなったと実感できる日々ではないだろうか。

死を語ることは、いかに生きるかを語ることでもある。死の意味を考えるからこそ、人は「今」を貴重に思い、生きることのすばらしさや他者とともにあることの意味を意識するようになる。「死にざま」は「最後の生きざま」なのである。学習者には重いテーマであるが、将来の人生設計を意識させるこのときだからこそ、命の尊さを再認識させるとともに、これからの人生をいかに充実させて「生きる」かを考えさせたい。

今回、学習者は古典から現代文まで、さまざまな文章を多読する。文中にある「死を意識して生きることで、充実した人生を歩むことができる」「人は誰でも『自分の役割』を持って生きている」などの

言葉を、自分の生活・人生の中でもつなげて考えていってほしい。そして、たくさんの文種の文章にふれることで、さまざまな日本語の姿にふれ、日本語への興味を持たせていきたい。

さて、平成24年11月1日には、「古典の日」が制定された。今回扱う『平家物語』は長い間人々に愛されてきた古典作品である。古典とは何かを確認し、『平家物語』にふれ、日本人にとって大切な文化財産であることを実感することが、国際理解学習にもつながっていくと考える。そして、『平家物語』に書かれたことが単に昔のお話というだけではなく、現代を生きる学習者にもつながっているということを実感させていくことが必要である（例 『平家物語』の「知章の最期」における、父を助けて死んだ知章の行動や、子を見捨てた形となった知盛の心情。「東日本大震災」における、寝たきりの方を背負い避難する最中、津波にのまれた消防団員、最後まで避難誘導の放送をし続けた女性など）。

今回は、戦争と正面から向き合うことにより、命を見つめ生きる力を育む学び合いを期待する。今年には戦後70年という節目の年である。これまでの長い日本の歴史の中で、直接戦争下に置かれることのない生活を70年間も続けてこられたことは、なかなかない。そこには、戦争を体験した人々がさまざまな思いを「言葉」にして後世の者に伝えてこられたり数々の努力をされてこられたりしたという事実がある。自分や仲間の命を正面から見つめざるを得ない戦争を題材にすることで、命をみつめて生きることに関して、よりいっそう鮮明になることがあるだろう。そしてどんな「言葉」に、後世の人へも伝え響かせる力があるのかを実感できるだろう。

また、ここでの学習はこれで終わるのではない。学習者自身がこれからの人生設計を立て、実際に人生を積み重ねていくさいに、またこの言葉にたちかえり、改めて言葉の意味を実感できるような、長期的展望に立った指導を行っていきたい。

なお今回の指導では、比べ読みの手法を使う。さまざまな、情報内容・伝達手段（書き方）・言葉を重ねていくことにより、読みを広げたり深めたりすることができるよう、意識して指導していきたい。

また今回、「死」を見つめさせるにあたり、身内を亡くした体験を持つ学習者たちをしっかりと配慮して学習を進めていきたい。

(2) 学習材設定の理由

未知の事象との出会い（死を意識して生きることで充実した生き方をするという考えかたとの出会い）→課題発見（言語表現を辿ることにより、様々な疑問を解決していくことで、激動の時代を生きた武士の人間像と第2次世界大戦中の日本人とをイメージ豊かにとらえていく。）→再構築された見方（今回学習した内容やテーマが、昔話だけではなく現実の自分の日常生活においても生かせることを知り、自分の「生き方」への意識を深くする。）という流れとなる。

なお、この単元は現代文（説明文・随筆・小説）と古文を共に学ぶ形になっている。今回の実践では、『平家物語』を中心教材としつつ、現代の文学作品・説明文・新聞などとテーマ的な関連を持たせた総合単元を構成する。古典の内容面への着目とテーマ学習（あわせて学習者の学び合い）の実践となる。

中学2年生は今回、初めての本格的古典に挑戦することになる。古文にこだわらず、さまざまなジャンルの文章と古文を読み比べることにより、現代と違う世界や価値観が存在していたことを知って理解を深めたり、現代と変わらぬ人間のありようにふれて古典と現代文のつながりを意識したりすることができ、視野を広げていくことができる。つまり、「横への広がり」を実感することができるのである。

また、古文は言葉や時代背景の壁が大きいものだが、音読・暗唱学習を多用することにより、抵抗感を減らしていきたい。

2.3 研究主題との関わり

国語科では昨年度より東京学芸大学特別開発研究プロジェクトの一環として、「災害」「病気」「戦争」という3つのテーマから、「命を見つめて生きる力を育むための国語科の授業」について議論・研究・実践を重ねてきた。今年度は昨年度同様3つのテーマを、古典文学を中心として新たな教材開発を実践することになった。

第2学年では「戦（いくさ）と向き合う」をテーマにし、『平家物語』と第2次世界大戦中の日本の戦争を対象とする。それぞれの戦いの中で、人々がどのように言葉を通して思いを表現してきたかを比べ読みするという「しかけ・場の設定」を通して、もっと考えたい、読み深めたいという生徒の意欲を高めていく。

例えば『平家物語』の中でも、なかなか教材化されない場面（例『重衡生捕』『知章最期』『壇の浦の合戦』前半部）なども単元の中に組み入れることにより、学習者は自然に重ね読みをし、対比し、さらに読みたいという意欲を持つことができるであろう。また、古典である『平家物語』と、まだ生き証人がいらっしやる70年前の戦いをつなぐしかけにより、戦の中におけるさまざまな人の「最後の生き方」を知り、人々がどのように命と向かい合い、命を見つめて真剣に生きたかを意識することができる。これによって、ここでの学びが、今を生きる自分のこれからの人生にもかかわりを持つことに気づいていくことを期待したい。

また、本実践では、学び合いの場が多く生まれるような教師の仕掛けをしている（氏名マグネット・自己評価座席表（通称「さりはカード」）・グループ学習など）。これらの環境により、積極的に仲間との意見交流に参加し、お互いにさまざまな刺激を受け、自分もまわりに影響を与えていくことができる。仲間と交流することによって思考を広げたり深めたりすることができることは、さらなる意欲を生むのである。

2.4 学習指導計画（全20時間扱い）

単元全体の学習指導計画

- 第1単元 『想う』『心のバリアフリー』『わすれられないおくりもの』『葉っぱのフレディー命の旅ー』・デーケン氏の死生学（新聞記事）・東日本大震災後の選抜高校野球大会や都市対抗野球大会の宣誓文・投書などの読解を通して、「メント・モリ」（死を意識して生きる）の意味を知る。 [3時間]
- 第2単元 発言広告「ボケないで、若者。』『大人になれなかった弟たちに……』をはじめとし、戦争下での暮らしの様子や、ぎりぎりの生活の中で自分の命や仲間の命を見つめて生きた人々の心情がしのばれる文章を読む（さまざまな小説・手紙・遺書・戦争体験手記など。戦地にいた人や銃後の護りにいた人、愛する仲間を失ってから思いを寄せる人々など、さまざまな立場の人々の文章を比べ、重ねて読み、「言葉の力」を実感しあう。）。 [3時間]
- 第3単元 『平家物語』の読解を通して、昔の武士が戦（いくさ）の中でどのように命を見つめてさいごを生きたかを読み取る。 [8時間]
- 第4単元 70年前の戦争末期にかわされた2人の兵士の思いを手紙から読み取り、『平家物語』に登場した人物の思いとの共通点や相違点を考えつつ、今と昔の戦の中で人々がどのように命を見つめ、どのような言葉の力を見せたのかを、実感しあう。 [2時間]
- 第5単元 見聞きした戦争体験者の話、戦争体験を語った文章などを用いながら、戦の下で人々がどのように自分や仲間の命を見つめて生きたかを知り、自分の考えをまとめるための情報を広げたり深めたりしたうえで、今までの学習や体験をいかし、具体例を選び、自分はこれからいかに生きようとするのかを文章にまとめる。 そのさい、仲間との相互批正も行う。 [4時間]

2.5 第3単元の、評価規準 181ページを参照されたい。

2.6 本単元で扱う教材（教材開発したもの）について

教科書で戦争を題材としている既成教材はたくさんある。それらは十分に成果をあげていると実証されているものである。しかし、今回は教材開発の観点からも、既成教材のみならず、実際に戦時中を生きた方々の生の声を多く取り入れたいと考えた。そこで、戦時下の手紙・日記・随筆なども広く教材化の視野に入れている。戦時下にあつて人々がいかに自分の、あるいは大切な人たちの命を見つめ、どんなことばを紡ぎ、ことばの力を実感しあつたか、多くの文章を重ねて読むことで、生徒にも見え、響いてくるものがあると考えたのである。

中でも、遺書は「命を見つめる」と言う点では究極の文章である。「特攻隊員の遺書」というだけで、偏向教育と指摘する人々が存在する現在、ある意味、この選択は避けたほうが無難であるかもしれない。しかし今回は何ら思想教育の対象としては考えていない。自分の死と向かい合ったとき、人は何を考え、どんなことばを残すのか。共に戦争未体験者として複数の遺書・日記・手紙を学習者と共に読み、検閲

観 点	評 価 規 準	評 価 規 準 の 例
関 心 ・ 意 欲 ・ 態 度	1 意欲を持って、 古文を音読し たり仲間との 話し合いに参 加したりする。	B 繰り返し音読することで暗 唱にいたることが出来る。 B 仲間の意見に耳を傾けなが ら、昔の人の生き方・もの 考え方や作品における登場人 物の役割・構成などを理解し ようと努力することが出来る。
伝 統 的 な 言 語 文 化 と 国 語 の 特 質 に 関 する 事 項	1 古文独自の表現 の仕方や古文 の特徴に注意 して平家物語 を読んでいる。 2 平家物語に表れ たものの見方 や考え方に触 れ、登場人物や 作者の思いな どを想像して 自分の意見と 比べている。	B 歴史的仮名遣いを意識した 音読をとおして、古語と現代 語との発音やリズムの違いを 指摘し、語りの文学である平 家物語ならではの、七五調や 情景描写に気がつくことがで きる。 B さまざまな武士の生き方を 重ねて読んだり、同じ人物に おけるさまざまな場面での言 動を重ねて読んだりすること で、共通点や相違点を挙げる ことができる。 B 武士や作者のものの見方・ 考え方を想像したうえで、自 分やまわりの人々と比較し、 自分の考えを表現することが 出来る。

をかいくぐってでもにじませた思いや純粋な心を読み取っていきたい。死を想うことは生を想うことにもつながる。最後の「生」のことばの美しさを共に味わいたい。

特に、今回私が教材開発したのは、昭和20年6月に沖縄海上において特攻戦死された、枝 幹二氏の遺書、およびそれに加筆修正を行い、かつ枝氏の遺書の後に枝氏のご遺族にあてて手紙を書き加えた末永武吉氏の手紙である。これについては、165ページから始まる拙稿「戦（いくさ）と向かい合う

【その1】～兵士の遺書を読み解くことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感しあう、教材の開発～」を参照されたい。

2.7 教材化・教材の価値

結果的に教材化したものは、以下のとおりである。これは昨年度の3年生に対して実施したものと重なる部分がある。(注1)

◎既に教科書教材であるものを使用したもの

- A 想う (五木寛之 著)
- B 心のバリアフリー (乙武洋匡 著)
- C 葉っぱのフレディ 一命の旅 (レオ・バスカーリア作)
- D 大人になれなかった弟たちに… (米倉斉加年 作)
- E 凧になったお母さん (野坂昭如 作)
- F 木曾の最期 (東京書籍)
- G 壇ノ浦の合戦 (三省堂)

◎私的に教材開発したもの

- H 平成23年春の選抜高校野球大会開会式の選手宣誓 (東日本大震災直後)
- I 平成23年都市対抗野球 選手宣誓 (東日本大震災半年後)
- J 毎日新聞 余録ほか、新聞記事や投書 多数 (デーケン氏の死生学など)
- K わすれられないおくりもの (スーザン・バーレイ作)
- L 知識人99人の死に方 (荒俣 宏監修)
- M 週刊誌の記事 (抗がん剤を拒否して壮絶な生き方をした人の話)
- N 第75回毎日広告デザイン賞第2部 発言広告最優秀賞 「ボケないで、若者。」

○関口清氏・大塚晟夫氏・板尾興市・中尾武徳氏・柳田陽一氏・吉村友男氏・上原良司氏・横山善次氏・枝幹二氏・西田高光氏・穴澤利夫氏の手紙・日記・遺書（『きけ わだつみのこえ』『英霊の言の葉』『陸軍特別攻撃隊の真実 只一筋に征く』より。枝幹二氏については、富山縣護国神社に奉納されている現物を拝見した。）

P 山口青邨氏・北村栄馬氏・川合四郎氏・雪ノ浦テツ氏の日記・手紙（「盛岡てがみ館の展示」『英霊の言の葉』）

Q 山野清子氏・西沢都彌氏・立川絹江氏の手紙・短歌（出典は『英霊の言の葉』同右）～従軍看護婦の立場からの文章～

R 中村メイコ氏の話（『昭和20年夏、子供たちが見た日本』より）～子どもの立場から見た文章。戦争中でもユーモアを忘れない父と慰問に駆り出されていく子役スターの様子が描かれる。

S わたしが死について語るなら 山折哲雄

T 古典の日に関する法律

U 平家物語 ビギナーズ・クラシックス

V 日本古典文学全集 平家物語①②

W 常山紀談 輝虎平家を語らせてきかれし事〔付〕佐野天徳寺のこと

X 文部省唱歌 青葉の笛

Y 枝 幹二氏の遺書(教材開発について記した173ページからを参照されたい。出典は富山縣護国神社)

Z テロで妻を失ったレリスさんのメッセージ

※発展読書 …… 戦後70年を記念して、毎日新聞が募った「千の証言から」の特集・各新聞社にある、戦後70年を記念した戦争関連記事・本校にある、太平洋戦争生き証人の手記あれこれ・本校図書館にある戦争関連本や、教材開発の中にあつて私の判断でサブ教材と位置付けたもの（例 シベリア抑留・引き揚げの苦勞・様々な方の遺書）と合わせて、1時間を発展読書の時間と位置付けた。学習者は各自、興味のある資料を手にとって、読みを深めていた。

◎教材の構成・価値

今回はたくさんの教材を重ね、比べ読みをすることにより、学習者に様々な視点を持ってもらいたいと考えた。さらに、『平家物語』に表される昔の人々と、特攻隊員に代表される70年前の兵士とその関係者との考え方を比較する。

Aは、「メント・モリ」（死を想え）、つまり人間の命は永久ではなく、誰にも必ず死が訪れるということを学習者に自覚させるための、単元の導入教材である。有限の命をどう生きるか？そこで、HIを読み、「今」を精一杯生きることの大切さを学ぶ。

次に、BKを読ませることにより、人として生まれたからには誰でも「役割」「生きる価値」があることを学ぶ。Cは「有限の命」と「人の役割」を共に学び直すことができる。Mもこの流れを組む文章である。

さらにNを使い、学習者の日常が戦争とかけ離れていることを自覚したうえで、「生きることを制限された戦争を通して、人々はどのように命を見つめ、それを言葉にしたか。どんな言葉に力があるか。」をさぐるという、今回の単元の目標を明確にする。

ここまで来て、まず初めは教科書教材になっている小説（DE）を使い、太平洋戦争の戦時中の様子や人々の思いがどのように表現されているかを読み取る。

そのうえで、今度は小説ではなく、辛い現実を生きた方々の心の叫びともいえるべき、日記・手紙・遺書の読みである（OP）。初めは遺書と気がつかない学習者たちでも、追い詰められている状況、最後の挨拶であることを読み取っていくうちに、言葉ひとつひとつの重さを感じるであろう。

また、どうしても戦争というと男性ばかり前に出てきてしまうので、PQという、従軍看護婦であった方の手紙を使い、検閲がある中で、いかににげない言葉の裏に本心を添えていたかを読み取らせる。

さらにRは戦争中の生活を子供の目から見た文章である。悲しい中にも明るい考え方のあったことがわかる。こうして、戦争を様々な観点から学習者が見られるように努力する。

Jの新聞記事多数は随時挿入して、過去と現在はつながっていることを意識させる。

以上が70年前までの戦争を舞台とした読みである。ここからは『平家物語』という800年前の戦に繋げていく。

これまでの学習との橋渡しはSTである。今なぜ古典なのかを考えさせる。いつの時代にも価値を見出せるものが古典であることを確認したうえで、平家物語の学習に入り、UFGをメインとしながらも、随時Vを使い、話を広げていく。『平家物語』に存在するたくさんの人物像に触れさせるため、WXも使用しながら、それぞれの人物が戦に直面したとき何を考え、どんな言葉をつむぐのかに意識を向けさせる。

昔の人たちには、現代人には理解できない思考がある。それを拒否するのではなく、登場人物に寄り添って理解してあげようとする姿勢が生まれてきたうえで、教材を再び70年前に戻す。

Yは今回教材開発をした部分である。枝氏という特攻隊員の遺書と、彼と常に行動を共にし、彼の最期も見送った末永氏との関係は、まるで『平家物語』に出てくる主君と乳母子との関係のようだ。学習者がこれまで学んできた現代の戦争と昔の戦をどのようにつなげてこの教材を読むことができるか。

最後にZは、リアルタイムで世界に起きている不幸な出来事を扱っているのだが、改めて生きるとはどういうことかを考えさせる教材として選んだ。

そのうえで、70年前の戦争の生き証人が語る言葉を読み、これまでの学習を通して自分が考えたことを文章化し、仲間と推敲しあって、文集を作るという計画をたてた。

2.8 単元学習の実際（概要）および生徒の実態や反応

昨年度の3年生にも戦争をテーマにした単元学習を組んだ経験があるため、今年度の2年生に戦をテーマとした単元学習を組んで実践するにあたり、どうしても昨年度と比較することになった。今年度の学習者は明るく素直な学習集団で、反応もよいのだが、その興味が持続しなかったり、すぐに思い込んでしまって深く読もうとはせず、思考の深まりとしてはつながっていかなかったりする傾向があった。昨年度の3年生は戦争についてもっとわかろうとする意識が高かった。しかし今年度の2年生は、全く悪気はないのだが、教師の言葉がなかなか学習者の心に届かず、表面的な読みで終わる残念さがあった。ゆえに、戦争の世界概要についてイメージを膨らませるのに予想以上に時間がかかった。これが発達段階の差によるものなのか、個人差なのかはわからない。がしかし、教師は学習者に寄り添って、時間をかけて指導していく必要に迫られた。

【第1単元での様子】

当然ながら、中学2年生は毎日の生活の中で、死を意識して生活をしてはいない。しかし、戦争が終わり、経済的に豊かになり、寿命ものびたにもかかわらず、充実し満足した生き方ができずに苦しんでいる人は多い。死は人生の着地点であるにもかかわらず、日本ではこれまで死はタブー視されてきた。なんとなく今を生きただけで、将来の夢も抱けない人を見るにつけ、ここで改めて、死の意味を考えさせることは意味があった。

特に4年前の東日本大震災においては、地震・津波などによるたくさんの「死」が報道された。学習者にとっても、今や「死」と無縁の生活ではなくなったと実感できる日々なのである。

死を語ることは、いかに生きるかを語ることでもある。死の意味を考えるからこそ、人は「今」を貴重に思い、生きることのすばらしさや他者とともにあることの意味を意識するようになる。「死にざま」は「最後の生きざま」なのである。学習者には重いテーマであるが、将来の人生設計を意識させるこのときだからこそ、命の尊さを再認識させるとともに、これからの人生をいかに充実させて「生きる」かを考えさせていった。

エッセイ『想う』を使つての「メメント・モリ（死を想え）」という考え方の導入には、大きな動揺があったようであった。「東日本大震災」における、寝たきりの方を背負い避難する最中、津波にのまれた消防団員、最後まで避難誘導の放送をし続けた女子職員。亡くなった方々を想いながら今自分にできることを一生懸命にしようと呼びかける野球の宣誓。誰も人には「役割」があるとする乙武氏の言葉。これらにより、死を正面から受けとめて考えようとする気持ちが生まれた。

【学習者のノートより】…… 今まで私は、「生きている自分」について考えたことがなかった。というより考えることができなかった。人は今自分が取り組んでいることにめいっぱい、客観的に見る事ができないくせに、友達のやっていることは冷静に見つめることができ、たまには助言をあげちゃったりなんかする。それと同じだ。今私は生きているから「生きている自分」については考えられないのだと思う。

だが今回私はもう1つ、「死ぬこと」という存在があることを知った。「生きている」ということは考えられなくても、「死ぬ」ということは考えることができる。死ぬということを見ると自然と、今生きている自分の姿が見えてくるような気がする。例えるなら、「死ぬ」という名の鏡が前に出てきて、今生きている自分を見せてくれているような気がする。

今まで私は「死」に対してマイナスのイメージしか持っていなかった。そして今授業を受けてきたからといって、そのマイナスのイメージが消えたわけでもない。だが、ただのマイナスではなくなった。それは、今をプラスにするマイナス、死へのイメージがマイナスになるほど、今の人生にプラスされていく感じがある。生と死とは互いに高め合っている関係にあると思う。

私はそれに気づけたときから、私の役割を探すようになった。そして自分の特技を考え直した。そしたら自然と、自分に、前より自信を持てた。さらに友達のことも考えるようになった。友達が得意なことは何か。そしてきっとそれがその友達の役割であることもわかった。人間は死を考えることで、こんなにも考えを変えられるのかと、自分でも自分に感心した。

だがひとつ気がかりなのは、「死」を思って人生を変えていくという技を、誰もが好むというわけではないということ。今までの歴史上、本能的に日本人は死を遠ざけてきた。その本能が1気にゴロツと変わることはない。日本中に新鮮な風が吹いてくれたらよいと思う。(以下略)

【第2単元での様子】

戦争と正面から向き合うことにより、命を見つめ生きる力を育む学び合いを期待する場面である。今年には戦後70年という節目の年である。これまでの長い日本の歴史の中で、直接戦争下に置かれることのない生活を70年間も続けてこられたことは、なかなかない。そこには、戦争を体験した人々がさまざまな思いを「言葉」にして後世の者に伝えてこられたり数々の努力をされてこられたりしたという事実がある。自分や仲間の命を正面から見つめざるを得ない戦争を題材にすることで、命をみつめて生きることに関して、よりいっそう鮮明になることがあるだろう。そしてどんな「言葉」に、後世の人へも伝え響かせる力があるのかを実感できるだろう。太平洋戦争の状況を文章からイメージさせるのに、思いの他に手間取ったが、様々な立場からの遺書・手紙、生き証人の方々の文章を読む段階では、戦争体験者の気持ちが信じられないとしつつも、そこで思考停止にはせず、当時の人々の考えを考えてみようとする態度が生まれてきた。

【第3単元での様子】

平成24年11月1日、「古典の日」が制定された。今回扱う『平家物語』は長い間人々に愛されてきた古典作品である。古典とは何かを確認し、800年前の戦を語る『平家物語』にふれ、日本人にとって大切な文化財産であることを実感することが、国際理解学習にもつながっていく。そして、『平家物語』に書かれたことが単に昔のお話というだけではなく、現代を生きる学習者にもつながっているということを実感させていくことが必要である（例 『平家物語』の「知章の最期」における、父を助けて死ん

だ知章の行動や、子を見捨てた形となった知盛の心情は、前述した東日本大震災での様々な行動をとった人々と重なる。)

今回、学習者はさまざまな文章を多読したのだが、その中の1つに、古典としての『平家物語』がある。2年生は今回、初めての本格的古典に挑戦したわけだが、単に古典を学ぶというのではなく、「戦(いくさ)と向き合う」というテーマのもとでの1資料として読むという姿勢を前面に出した。戦いの中で人々がどのように言葉を通して思いを表現してきたかを、『平家物語』と「太平洋戦争下で生きた人々」とで比べ読みするという「しかけ・場の設定」を通して、もっと考えたい、読み深めたいという学習者の意欲を高めていった。

例えば『平家物語』の中でも、なかなか教材化されない場面(例『重衡生捕』『知章最期』『壇の浦の合戦』前半部)なども単元の中に組み入れることにより、学習者は自然に重ね読みをし、対比し、さらに読みたいという意欲を持つことができた。平家一門が滅亡する壇ノ浦の合戦においても、二位殿(女性代表としての存在)・安德帝(子ども・天皇の立場から)・宗盛(生に執着する姿)・教経(壮絶な最期を遂げる「動」の姿)・知盛(「見るべきほどのことはみ」てから入水する「静」の姿)という複数の人物が物語には用意されているので、自然に重ね読みできるようになっていった。

今回、『平家物語』の学習で軽重を問わず扱ったエピソードは、以下のとおりである。(なるべく多くの人物像についてふれ、それぞれの学習者が『平家物語』に関心を持つ窓を増やせるよう心掛けた)。冒頭(平曲)・敦盛の最期(平曲と読解)・木曾の最期(巴への思い→太平洋戦争において、ペリリュー島の住民を追いやる形で逃がした中川守備隊長とつなげる・乳母子の今井四郎との絆)・重衡生け捕り(主君と乳母子のペアを義仲と重衡とで比較)・知章の最期(父知盛を救って亡くなる息子・逃げてしまいが平家一門をしょって立たねばならない、父知盛の苦悩・それを見守る宗盛→東日本大震災において命を投げ出した消防団員や職員と重ね読み)・壇の浦の合戦における、一般の女房たち・二位殿、安德帝、宗盛、教経、知盛の動きを対比しつつ読む・那須与一・文部省唱歌「青葉の笛」から、敦盛の最期・平忠度の最期・平家一門の魂を鎮める役割を担ってからの平徳子の多岐にわたり、構成面では、『平家物語』の構成の妙(いったん上げてから下げる。下げてから上げる、という、現代でも行われている、インパクトを与えるストーリー展開法や、平宗盛を使った対比、教経の史実を曲げてでも演出効果をねらう構成の妙)を学ぶことによって、彼らは『平家物語』を古臭い話としてとらえるのではなく、現代でも通用する面白い話としてとらえるようになっていた。

また本実践では、学び合いの場が多く生まれるような教師の仕掛けをしている(氏名マグネット・自己評価座席表(通称「さりはかーど」)・グループ学習など)。これらの環境により、積極的に仲間との意見交流に参加し、お互いにさまざまな刺激を受け、自分もまわりに影響を与えていくことができた。仲間と交流することによって思考を広げたり深めたりすることができることは、さらなる意欲を生むのである。

【第4単元の様子】

再び太平洋戦争時に話を戻す。今回教材開発した枝幹二氏の遺書を中心に読みながら、整備兵末永武吉氏とのつながりや思いを読み取らせていく。このお二人を既習とつなげた結果、枝氏&末永氏の関係を、『平家物語』の木曾義仲&今井四郎兼平、平知盛&伊賀平内左衛門家長に重ねた者もいた。

また、枝氏が最後に書かれた文章(詩)の読み取りにより、改めて戦の中における「最後の生き方」を知ることができた。そして『平家物語』でも太平洋戦争でも、人々がどのように命と向かい合い、命を見つめて真剣に生きたかを意識することが増えていった。これによって、今回の単元の学びが、今を生きる自分のこれからの人生にもかかわりを持つことに気づいていくことにつながったのである。古文にこだわらず、現代文(説明文・随筆・小説)の様々なジャンルの文章と共に学び、読み比べることにより、現代と違う世界や価値観が存在していたことを知って理解を深めたり、現代と変わらぬ人間のありようにふれて古典と現代文のつながりを意識したりすることができ、視野を広げていくことができる。つまり、「横への広がり」を実感することができた。

〔第5単元の様子〕

こうして、学習者は単元の学習の最後に、各自が到達した考えを文章に書き、仲間と相互批評しながら、まとめていった。できあがった作品は文集にして全員に配布した。

2.9 自己評価座席表（通称さりはか一ど）（ミニ・ポートフォリオ）について

通称「さりはか一ど」は、私が長年にわたって開発・実践してきたもので、毎時間登場する。

さ …… 今日の学習の3加度（4・3・2・1の4段階で自己評価）

り …… 今日の学習の理解度（4・3・2・1の4段階で自己評価）

は …… 今日の発見を簡潔にまとめる。

か …… 今日の一口感想

人 …… 今日の学習の中で心揺さぶられた人（筆者・作者・登場人物・学習仲間・教師など）

これを毎時間、学習の最後に、縦6cm、横3cmの小さな用紙の中に「さ・り・は・か・人」の5項目を書き、A3の台紙に貼る。全員が貼り終わったら座席表と同じ配置になるように貼る。教師はB4版に縮小印刷し、その日のうちに学習者に配布する。これを次の授業の初めの時間に全員で読み合うことで、復習とするのである。

授業者から見ると、この1枚で学習集団の到達度・全体的傾向・学習者の実態が把握できる。これを毎時間積み上げることにより、ポートフォリオともなりうるので、1人の学習者の学びの軌跡を知ることにもできる。おさえの弱かった部分もあぶりだされてくるので、次時の指導に役立てることもできる。

学習者から見ると、全員の紙面発言の場となるので、意思表示や意見交流ができる。また、お互いの自己評価を知ることになり、評価の仕方も学んでいくことになる。

今回の単元学習でも、「さりはか一ど」は毎時間活躍した。学習者一人ひとりの到達点が学習集団に示され、今誰がどんな考えを持っているかという情報が公開された中での学習の積み重ねとなった。

【学習者のノートより】 私は「さりはか一ど」を重宝している。友達の宝物のような考え方一つひとつに対して、私も意見を持ち、時には反論し、お互いを知り合う。普段は聞かないような友達の意見を知れたり、毎日の授業は私にとって成長する場だ。すべてが「さりはか一ど」や「ノート」にまとまるわけではないが、上下する私の気持ちや友達の感情を残すことになるこのノート（「さりはか一ど」）を、宝物にして次につなげたい。

3 実践の中から（その1）

第3単元 第3次第2時 『平家物語』より「壇ノ浦の合戦」の読解部分

3.1 第3単元の学習指導計画

第1次 平家物語オリエンテーション(2)

第1時 武士の思想（死の受けとめ方・名をのこす・名乗り）成立のしかた、作者、中心的思想などの確認をする。

第2時 語りの文学であることを実感（「祇園精舎」と「敦盛の最期」の平曲を一部鑑賞）し、物語の概要を知ったあとに、学習材の製本などを行う。

第2次 さまざまな武士がどのように命を見つめて生きてかを読む【その1】。(3)

第1時～第2時 「敦盛の最期」（名乗らない敦盛の心）・「木曾の最期」（巴を思う義仲と、ペリリュー島で日本兵が島民に見せた思いやりの比較・義仲と今井四郎兼平の最後の生きざまを読み取る。）

第3時 「重衡生捕」では逃げた乳母子の存在を知り、「知章最期」では我が子知章を見捨てざるを得なかった知盛の苦悩を読む。

第3次 「壇の浦の合戦」を読み取る。(2)

第1時 壇の浦の合戦の概要を知る。

第2時 壇の浦の合戦で最期を迎えた人々の中から1人を選び、その人物が命をどのように見つめ、どのような言動が見られたかを深く読み取って話し合う。(本時)

第4次 その他の場面で、さまざまな武士がどのように命を見つめて生きたかを読む【その2】(1)

「那須与一」「忠度の最期」などを読み、それぞれに死を意識しつつ命を見つめて生きた人々の姿を知ること、自分の考えを深める。

3.2 本時の学習

①本時の目標

- ・「壇の浦の合戦」を音読することで、語りの文学たる平家物語の特徴の一つである、七五調があることに気づく。
- ・平家滅亡の「壇の浦の合戦」に登場する平家方の人物(二位殿・安德帝・宗盛・教経・知盛・知盛の乳母子)に注目し、それぞれの「命を見つめる言葉」を確認することで、それぞれの人がどのように命を見つめ、最後の生き方を見せたのかを読み取る。"

②本時の展開 (189～190ページ参照)

③本時の評価 (190ページ参照)

3.3 学習者の反応

壇ノ浦の合戦において、主だった平家側登場人物を6名提示し、その中の1人を選び、その人の生き方やものの考え方、特に最後の生き方(死にざま)がわかるころ、力のある言葉に着目させた。グループごとに話し合ってから発表をし、広げていった。平知盛の乳母子である伊賀平内左衛門家長は誰からも選ばれなかったが(選ばれなかったのは、資料が少ないゆえと思われる)、その他の5人はまんべんなく選ばれた。グループによって深く読み取れたところと表面的なところで終わっているところとに分かれてしまったが、教師からの補足説明などにより、思考を広げたり深めたりしていった。

学習者が興味を示し、より深く読もうとした点を挙げてみたい。

【二位殿について】

- ・二位殿はりんとして男勝り。力強い。でも、その二位殿の見せた涙がとても印象的で、人間味があると思った。
- ・(助けてもらえる)女ではあっても敵の手にはかかりたくないという強い気持ちが理解できた。

【安德帝について】

- ・別に特別に頭がいいわけではない。でも何もわからないままに死んだのではない。8歳なりに天皇としてのプライドも持って、納得して死んでいく。女であろうと子どもであろうと、武士と同じ覚悟を持っているところに打たれた。

【平宗盛について】

- ・状況把握能力が皆無。最後まで「生」に執着していて、とことんカッコ悪いのだが、他の人の引き立て役という「役割」を持っている。となれば存在する意味はある。

【平教経について】

- ・よく調べてみて、読んでみて、やっぱりかっこいい。いかにも武士らしい最期に感動。壮絶。
- ・教経は最期まで武士として弱みを見せずに死ぬことを選んだのだ。

【平知盛について】

- ・「見るべきほどのことは見つ」リーダーとしてこれだけの言葉はなかなか言えない。一見何もしていないようだが、皆を最後まで見守るという覚悟の位置。静かに運命を受け入れている死に方というもの、すごい。

【伊賀平内左衛門家長について】(※授業中には誰からも選ばれなかったのだが、個人的に読みを進めて「さりはか一ど」に書いてきた者はいるので、それを示したい。)

- ・家長にも誇りがある。だから覚悟の「よろい二領」で主人と手に手をとって入水した。

【全体を通して】

- ・一人ひとりがそれぞれに、自分なりに死をしっかり見つめていて、すごいと思った。武士のカッコよさもカッコ悪さも、改めて感じた。
- ・一人ひとり違う考えが表現されているけれど、ひとつひとつ気持ちが納得できた。一人ひとりの思いが複雑で、悲しくなった。
- ・武士の最期について、新しい発見があった。比較できるように配置されていて、すごい。
- ・教経の死にはカッコいいが、誰でも死にたかったわけではなくて、それぞれの思いがあった。けれど、その思いを置いて覚悟を決めてるからこそ、最後までをしっかりと生き抜いたと思う。
- ・全員、死に対していろいろな考えがあるが、最終的には武士としてのプライドを重要視していると思う。
- ・一見、教経が目立ちそうなシーンだが、一人ひとり、命についてよく考えている言動があり、仲間を思ってもいた。そんな一人ひとりによさがあると思った。ひさんなシーンなのに、感動もあり笑いもありで、面白かった。
- ・それぞれの人の、死への思いがあって、それがその人のカッコよさ、力強さにつながっている。
- ・死を意識して、死に際に言う言葉にはみんな奥深さがあって、印象的だった。
- ・死ぬんだと腹をくくっているのは、メメント・モリの姿だ。
- ・死は共通だが、その意味は違うということが実感できた。それは現代にも重なる部分がある。

【表現法について】

- ・戦い終わった戦場を、「竜田川のもみじば」などと美しく表現するところがかえって切ない。
- ・七五調でリズムカルな平家物語を実感した。語りの文学は琵琶法師に優しい平家物語だ。
- ・わずかな文から感情が読み取れる平家物語はすごい。

3・4 成果と課題

①成果

さりはか一ど、竜田川の表現、人物の配置、対比、メメント・モリといったように、様々な広がりがあり、学習者がそれぞれの切り口で読みを深め、意欲を高めていく仕掛けが随所にあった。それぞれのグループの発見をもとに、総合的に考える姿勢があった。

②課題

同じ人物を選んだ者同士、4～6人のグループを作って話し合わせた。自分で研究テーマを選ぶという点は意欲を高めるものであったが、人物の行動をとらえきれておらず、表面的な読みに終始してしまうグループもあった。どのような支援ができるかをもう少し考えたい。

② 本時の展開

学習目標	学習活動	指導上の留意点	意欲を高めるための仕掛けや場の準備
習百生1 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・草時、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生2 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生3 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生4 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生5 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生6 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生7 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生8 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生9 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。
習百生10 一人一首の の練	・国語係がリードし、短歌を音読する。一省の歌を音読する。	・至仲、(モジの二)一回につき二首ずつ読み進めている。百人一首大会	・共に音読すること、高めの時を共有し、意欲を高める。

4 実践の中から（その2）

第4単元 70年前の戦争末期にかわされた2人の兵士の思いを遺書と手紙から読み取り、『平家物語』に登場した人物の思いとの共通点や相違点を考えつつ、今と昔の戦の中で人々がどのように命を見つめ、どのような言葉の力を見せたのかを、実感しあう場面。

4.1 第4単元の目標

第4単元 70年前の戦争末期にかわされた2人の兵士の思いを遺書と手紙から読み取り、『平家物語』に登場した人物の思いとの共通点や相違点を考えつつ、今と昔の戦の中で人々がどのように命を見つめ、どのような言葉の力を見せたのかを、実感しあう

第1時 ・「緑」「真青な空」「白い雲」「セミ」「小鳥」などありふれた自然の描写から、遺書に書き足したくなった詩にこめた「死を前にして再認識した自然の美しさ・生の実感」を読み取る。

- ・いったん完結させた遺書に書き加えずにはおれない思いについて、仲間と積極的に話し合い、自分の読みを深めたり広げたりすることができる。"

第2時 ・枝氏のご遺族に向けて、手紙を書き加えた末永氏の心境を読み取る。

- ・枝氏と末永氏の関係を手紙・遺書から推測するとともに、既習の『平家物語』で表現された人間関係との共通点を探る。

4.2 第4単元の学習の流れ（概要）

185ページの【第4単元の様子】を参照されたい。

4.3 本時の指導案（第1時）

①本時の目標

- ・「緑」「真青な空」「白い雲」「セミ」「小鳥」などありふれた自然の描写から、遺書に書き足したくなった詩にこめた「死を前にして再認識した自然の美しさ・生の実感」を読み取る。
- ・いったん完結させた遺書に書き加えずにはおれない思いについて、仲間と積極的に話し合い、自分の読みを深めたり広げたりすることができる。"

②本時の展開 192ページ参照

③本時の評価 192ページ参照

4.4 学習者の反応

【枝氏の書いた最後の遺書について】

枝さんの気持ちの変化によって、まわりの見方が変わる。彼は死を前にして、自然の美しさという新しい発見をした。当たり前だったことの大切さに気づき、気持ちは明るくなっただろう。死に行く人とは思えぬほど明るくて驚いた。死の直前でも自然のすばらしさに気づけるとは。普通が一番幸せ。でもそれに今気づくとはなんと悲しくて皮肉なことだろう。死のおかげで今のすばらしさを見つけれられるとはとても残酷。枝さんは文章が上手だ。

【枝氏と末永氏の関係について】

損得を超えた二人の信頼関係は、平家物語の世でも現代でもあるだろう。二人の絆は、まるで平家物語の殿と乳母子のようだ。平家物語と70年前の戦争が意外な結びつきをして、びっくりした。

末永さんは、戦時中でも、死ぬことが確かな人々にも思いやりを持っていた。末永さんはうそをついているかもしれない。でも枝さんの遺族のために手帳に書き足した。うそでも人が喜べば、いい方向に向かうこともある。末永さんのやさしさに感動した。気丈にふるまった枝さん。彼の死をしつかりと見つめて遺族に伝えた末永さん。二人の記録の文章から、戦争のつらさがにじみ出てくる。

4.5 成果と課題

①成果

教科書で戦争を題材としている既成教材も今回の単元学習には含まれるが、教材開発の観点からも、実際に戦時中を生きの方々の生の声を多く取り入れたいと考えた。そこで、戦時下の手紙・日記・随筆なども広く教材化の視野に入れた。戦時下において人々がいかに自分の、あるいは大切な人たちの命を見つめ、どんなことばを紡ぎ、ことばの力を実感しあったか、多くの文章を重ねて読むことで、生徒にも見え、響いてくるものがあると考えたのである。

中でも、遺書は「命を見つめる」と言う点では究極の文章である。「特攻隊員の遺書」というだけで、偏向教育と指摘する人々が存在する現在、ある意味、この選択は避けたほうが無難であるかもしれない。しかし今回は何ら思想教育の対象としては考えていない。自分の死と向かい合ったとき、人は何を考え、どんなことばを残すのか。共に戦争未体験者として複数の遺書・日記・手紙を生徒と共に読み、検閲をかくぐってでもにじませた思いや純粋な心を読み取っていきたくかった。

枝 幹二氏の遺書は2回書かれている。「備忘日記」に書かれた遺書は、定型的なごく普通の遺書である。それに比べて、本当の出撃を目の前にしたとき、彼が黒い手帳に書きこんだ遺書は全く異なる表現法をとっており、まさに詩とってよいだろう、これらは実は別の日に書かれたものである。遺書として完結したはずの文章に、出撃直前の「死への余暇」ともいべき最後の待機時間に、書き加えずにはおれなかったあつい思いが、詩の形として表現されたとは私は考えた。いつもはあたりまえの緑・空・雲が、今日は目に焼き付けるべき存在である。感受性が研ぎ澄まされた状況での、最後の発見である。死を想うことは生を想うことにもつながる。最後の「生」のことばの美しさを共に味わいたいと考えた。

ある学習者は既習教材である『虹の足』他とつなげ、「当たり前のことのすばらしさに気づくというのが、ここにもある」と発言した。これにより、学習者の視野は広がっていった。

また、末永武吉氏が枝 幹二氏の詩に加筆修正をしたうえで枝氏のご遺族にあてて書いた手紙には、短いながらも枝氏と末永氏との深い絆があふれていて、本当によい文章である。彼のついた優しいうそについては、学習者は自然な形で、巴を思う木曾義仲、ペリリュー島民を排除することで命を救った日本軍守備隊ともつなげていった。いろいろな意味で、学習者が既習事項とつなげ、広げるきっかけを作れる文章であった。

②課題

既習事項に深まりがある学習者ほど、この教材にはさまざまにつなげる視点があることがわかるのだが、反面、これまでを表面的、断片的な読み方に終始してきた学習者にとっては、この教材も1教材にすぎず、いろいろな視点からつなげて考えることが難しかった。つなげる手立てを教師がもっと工夫する必要があった。

5 学習者がたどりついたもの

戦を背景にしなが、そこにどのように命を見つめ、伝える言葉があるのか？を考えると、戦そのものを、あるいは背景としての戦争があるゆえに条件が狭められた表現法を使って、誰かが誰かにどうしても伝えたい内容があったとき、「命を見つめて伝える言葉の力」が実感できるのではないかと考えるようになった。これは、『平家物語』も現代の兵士や家族も同じである。

平家物語という古典と、70年前の戦争をつなげて読み深めるという行動は、学習者を動揺させたかもしれないが、さまざまな教材を比べ読みすることにより、それぞれの学習者が自分に引き寄せた読みをする自由さがあり、まとめの文章も多様化した。

以下に、学習者が書いた作品をいくつかを紹介する。

[作品例1 女子]

…今まで私は、「生きている自分」について考えたことがなかった。というより考えることができなかった。人は今自分が取り組んでいることにめいっばいで、客観的に見る事ができなくせに、友達のとやっていることは冷静に見つめることができ、たまには助言をあげちゃったりなんかする。それと同じだ。今私は生きているから「生きている自分」については考えられないのだと思う。

だが今回私はもう1つ、「死ぬこと」という存在があることを知った。「生きている」ということは考えられなくても、「死ぬ」ということは考えることができる。死ぬということを考えると自然と、今生きている自分の姿が見えてくるような気がする。例えるなら、「死ぬ」という名の鏡が前に出てきて、今生きている自分を見せてくれているような気がする。

今まで私は「死」に対してマイナスのイメージしか持っていなかった。そして今授業を受けてきたからといって、そのマイナスのイメージが消えたわけでもない。だが、ただのマイナスではなくなった。それは、今をプラスにするマイナス、死へのイメージがマイナスになるほど、今の人生にプラスされていく感じがある。生と死とは互いに高め合っている関係にあると思う。

私はそれに気づけたときから、私の役割を探すようになった。そして自分の特技を考え直した。したら自然と、自分に、前より自信を持てた。さらに友達のことにも考えるようになった。友達が得意なことは何か。そしてきっとそれがその友達の役割であることもわかった。人間は死を考えることで、こんなにも考えを変えられるのかと、自分でも自分に感心した。(以下略)

〔作品例2 男子〕

今までの授業で印象に残った「ことばの力」は主に2つある。1つ目は「ことばにはたくさんの意味がこめられる」ということ。2つ目は「戦争などのたくさんの死に直面している時力強いことばが生まれる」ということだ。これらを感じたときを3つ紹介したい。

1つ目は『大人になれなかった弟たちに…』の題名である。筆者が戦時中、弟のヒロユキ君が死んでしまう。ヒロユキ君1人が死んだ話なのに、題名は「弟たちに…」となっている。ヒロユキ君は代表例だからだ。戦時中はヒロユキ君以外にもたくさんの子どもの死んだということ、題名の「…」で表しているのだ。これは戦争の苦しみをより強く伝えることにつながる。たった3文字と「…」なのに、意味がとても広がっている。

2つ目は同じく『大人になれなかった弟たちに…』だが、ヒロユキ君が死んでしまった時にお母さんは、「ヒロユキは幸せだった。」と言った。なぜなら、ばらばらではなく家族に見守られて死んだからなのだ。このひと言で、いかに辛い状況なのか、戦争の苦しみがまじまじと伝わってくる。力強い言葉だ。

3つ目は『平家物語』の「敦盛最期」だ。敦盛は幾つかの力強い言葉を残している。その中でも敦盛が熊谷次郎直実に捕まった時に残した言葉、「ただとくとく首をとれ。」が印象的だ。これは自分を早く殺せという意味だ。敦盛はぼくたちとほぼ同じ年だ。しかも熊谷次郎直実は敦盛を殺すか殺さないか迷っていた。そんな中でぼくらとほぼ同じ年の青年は早く殺せと相手をせかしたのだ。ここに彼の、戦への覚悟と武士としてのプライドを感じた。

ぼくは今回の一連の授業から2つのことを意識して生きていこうと思う。1つ目は精一杯生きることだ。授業ではお話のなかで大人に限らず子どもや赤ちゃんまでたくさんの人が死んでしまった。そして幸運にも今僕たちが生きている世界は平和だ。だから生きられることに感謝し、死んでしまった人たちの分まで生ききりたい。2つ目は、細かな言葉まで注意して聞くことだ。今までは全体の内容をおおまかに理解することを意識していた。でも今回の学習でたった3文字程で意味の広さが変わることが分かった。だから、注意深く話を聞き、話し手の細かなニュアンスまで聞き取れるようになりたいと強く思った。

〔作品例3 女子〕

私は、第2次世界大戦と平家物語に関することを学び、今では考えられない生と死について考えた。戦さに関する文章を読むことは、自分の生活の内容とかけ離れていることもあり、とても衝撃的なことも多かった。しかし、その分、自分の心に強く残り、印象深い、ためになる学びができた。その中でも、特に自分の中に残っている2つの文章がある。

1つは、枝幹二氏が遺書としての日記の他に、最後に付けたと思われる黒い手帳の中にある文章だ。それは、「あんまり緑が美しい／今日 これから／死に行くことすら／忘れてしまひさうだ／真青な空／ぼかんと浮ぶ白い雲／6月のチランは／もうセミの聲がして／夏を思わせる／^ニ小鳥の聲が楽

しきう／俺もこんどは／小鳥になるよ、／日のあたる草の上に／ねころんで／ 杉本がこんなことを／云ってゐる／笑はせるな」というところ。特攻にあと少しで飛び立つ、死に行く間に書かれたものだ。この文章はとても素直な気持ちで書いたと思われる。内容も数日前に書いていた遺書の事務的な様子と違い、自分の思った本心そのまま記されている。また「緑」や「空」や「雲」などのいつも目にするものを改めて見て、目に焼きつけている様子が想像される。彼は死を前にして改めて、自然の美しさを発見したのだ。さらに、「小鳥」というのは、戦わない存在である。今の自分たちと重ねるととても楽しそうだったのではないか。この文章から多くのことを考えさせられた。死ぬという自分の運命と向き合う中で、枝氏が思ったことはたくさんあると思う。ことばでも残されている。生きていたい思いもあるだろう。死を前にしてもなお発見することがあって感動できる生の喜びと同時に、別れの悲しみもあるだろう。命を見つめ直すことができた枝氏を、私は尊敬する。彼は1日を必死で生きていた。このように、命の重みと第2次世界大戦の厳しさを学ぶことができた。

2つ目は、平家物語で平知盛が言ったことばである。「見るべきほどのことは見つ。」と壇ノ浦の合戦で平家の負けが決定的となり、知盛が平家一門の死を見届けてから言ったひと言である。この後、知盛は乳母子の伊賀平内左衛門家長とともに入水する。このひと言には、リーダーとしての責任や役割が強く感じられる。家族や仲間たちの死を目の前で見ることは、本当に辛いことだと思う。しかし、事実上のリーダーとして、自分も死ぬ直前の中、人々の死を見届けるという役割を果たさなければならぬ。このことばから、何人もの死があり、それをすべてみた知盛の大変さや過酷さが感じられた。

この2つのことばは、時代も違えば、状況も違う。しかし、共通点もある。それは、死に行く間際のことばだということだ。死を前にしたときにできた2つのことばとも、今の私たちには、想像できない辛さや過酷さが背景にある。今の私にとって、死はあまり身近ではない。でも、死ぬ間際のことばから、亡くなっていく人の本当の思いを感じ、命について身近なものに少しはできたと思う。そして、命を改めて大切なものと国語の授業を通して見つめることができた。大切とわかっているが死というものに分らなければ、何が大切なのか、よく分からないだろう。しかし、あまり学ぶ機会のない生ではなく、死を学ぶことで生を見つめ、理解できるようになると思う。また、多くの生と死に関することばを学ぶことで、ことばのすばらしさ、力を感じることもできた。

【作品例4 男子】

…プロ棋士の天野貴元さんは、癌になって「もう治らない」とまで医師に言われてしまった。ぼくにはとても想像できない。自分があと少しの命と分かっているが、「ベッドの上で命を延ばすのは僕の生き方じゃない」とまでいって、自分の意思で退院して将棋を指し続けたという。この人にとっての将棋はいわゆるパートナーのようなものだ。将棋は天野さんにとって生きる糧となり生きるという目標をくれたものだったのだと思う。

次に、平家物語の平知盛についてとり挙げたいと思う。彼は「見るべきほどのことは見つ」といって入水している。これは、やるべきことはもうすべてやったから、納得のいく人生として生涯を終わらせたということだと思う。そういう風に見れば残り少ない命を大切に使ったといえるのだろう。事実上の平氏の総大将としての役割をしっかりと果たし、仲間の死を、平氏の最期を見届けてから、入水した彼はこの時代の理想だったのだと思えた。

この授業を通して僕が学んだことは、「命はいつ終わるかわからない」から、与えられた時間を大切に使うということ。また、今の自分に何ができるのかを、そして何が必要かをしっかりと考えたうえで、人や物事と対峙していかなければならないということだ。このようなことを、普段の生活の中で意識して生活し、今回学んだことを無駄にしないようにしていきたい。

また、学習者が以下の点において意識したことについて、まとめてみたい。

◎ 「命を見つめる」ことについて

・ 今までこんなに命について考えたことがなかったので、今回の学習で自分の命をじっくりと見つめ直し、考えが変わりました。私も、誰かに何かを残す、死んでしまっても皆の心の中で生き続けることができたらしいなと思います。そのためにもやれることを考えました。ただ具体的に何をしたらいいのか、何をすれば役に立つかはとても難しく、詳しく決めるのは無理でした。なので、今は、自分なりに楽しくたくさんのことを学びながら生きていきたい。何気ない一日一日を大切に生きていきたいと思います。今回この学習をして、当たり前前のことの大切さと難しさが改めてわかりました。この学習をしてよかったです。この学習が最後ではなく、これからもときおり思い出して、命について見つめていけたらいいと思います。

・ 命というのは、身近でいて身近ではない。人は生きていうちに死ぬことを経験することはないから、それを考えることはすごく難しい。でもそれは答えにたどりつかなくても、常に考えておくことが大切なのだと思う。

・ 私は今まで「命」を重く考えすぎていた。たった1度の人生だから、失敗は許されないし、何か後世に残るような大きな偉業を成し遂げなくてはならないと考えていた。しかし、そんなプレッシャーを感じる必要はなく、まわりの人にだけでも、自分が幸せを届けられればいいのだな、ということがわかった。無理に気張らないで、限られた人生を自分らしく生きたいと思った。また、「死ぬことは怖い。」とのみ考えていたが、生きている今から死について考え、自分や他人の死と向き合うときにパニックにならないようにしたいと思った。

・ 死についての見つめ方が変わった。始まりがあれば終わりがある。必ず死ぬ運命の私たち。その最後をどうするか。それまでの期間で何をするか。まだ答えは出てこない。でも、与えられた命を精一杯生きて、生きることが大事なのだとわかった。

・ 学習を深めるにつれて、今生きていることをしっかりしようと思った。おしゃべりや食事などを楽しむという当たり前前の生活を楽しんでいきたいし、それらを行うにはいろいろな人に協力してもらったり支えてもらったりしていることを考えて、感謝の気持ちも忘れずにいようと思う。

◎ 『平家物語』について

・ 心に残った場面が2つあります。1つめは、木曾義仲と巴の別れの場面です。義仲は本当は巴とずっと一緒にいたいはずなのに、巴の命を守るためにわざとつきつことを言って巴を逃がしてあげたところに、本当の愛を感じました。とても感動しました。もう1つは、徳子が出家したときにわが子である安徳帝の着物を差し出す場面です。自分の母も子供も死んでしまい、とても悲しい中、唯一の宝である、自分の子供のおいもまだ消えていない大切な着物（我が子が着ていたから）を、自分が生きていくために差し出さなくてはならないというのが、とても悲しくて、想像しただけで涙が出そうでした。戦には必ず何か悲しいものが出てくる。誰かが悲しい思いをすることは、昔も今も変わらないことがわかりました。

・ 好きな武将を見つけることができて、よかった。

・ 乳母子がキーワードだ。乳母子は血がつながってなくても、小さなときから同じ母に育てられる。そしてその後も主従関係として深い深い絆をつくりあげる。これは現代にはない関係だ。平知盛と伊賀平内左衛門家長の最期の場面は、まさに二人の絆の深さを表現した場面であった。知盛の「見るべきほどのことは見つ」の言葉とともに亡くなった静かな死にざまは、教経のいかにも武士らしい華やかな死にざまと対比構造になっていて、とても印象に残った。

・ 平家物語は難しいと思っていた。でもその中には、書いた人達の細やかな技術や気持ちがこめられていた。古典というのは昔から今に至るまで何らかの価値が認められてきたという。そのとおりだった。対比させてのストーリー展開はすごくよく考えられていた。それに能登殿は史実ではもっと前に死んでいたのに、物語を面白くするためにはその事実をもねじ曲げる。その、物語作りにこめた気持ちはすばらしいなと思った。平宗盛を徹底的にダメな人間にすることで、ほかの人物が引き立って、物語はぐんと面白くなった。本当にあったことを書いているのにフィクションにする自由があって、すごいと思う。

・ 古臭くて難しく面白くないだろう、と思っていた平家物語が、意外とユーモアがあったり、対比などたくさん技法が使われていたり、現代にもつながる心情があったり、ダイナミックな描写があったりと、意外な魅力があった。松原先生の音読力によって、堅苦しい古典のイメージがくずれて、心から楽しむことができた。「古典」として現代まで残っているからには、やはり今の人でも楽しめたり考えさせられたりする魅力があるのだということが、改めてわかった。もっと平家物語を読みたいと思ったし、ほかの古典も読んでみたいと思うようになった。

・ 壇ノ浦の戦いでは、残酷なシーンをあえて美しい印象になるように表現している。海外ではリアリティーが求められるからストレート表現になるが、日本ではあえてそれを避けて、美しい表現で残酷かつ悲しい場面をイメージさせる。これが日本のよい部分だと気づくことができた。

・ 女性も活躍していた。女性兵士である巴。最後までプライド高い二位殿。

・ 「祇園精舎の鐘の声」で始まる文章の美しいこと。始まりには終わりがある。僕が一番無常観を感じたのは安徳天皇だ。天皇という、日本のトップの立場で生まれながら、壇ノ浦の戦いで八歳でお亡くなりになる。でも安徳帝は小さいながらもその運命を受け入れた。なんといいさぎよい、まるで武士のような最期だろうか。「死」を意識して生きるメメント・モリを実感させられた。

◎70年まえの戦争における、人々の体験と思いについて

・私が一番心に残ったのは、ペリリュー島の島民の命を守るために、中川隊長が「ふざけるな！我々は貴様らのような人種とともに戦いたくはない。今すぐこの島を出ていけ！」と、嫌われるようなことを言ったことだ。本当に男らしい。このおかげで、今もパラオでは日本人の墓が守られ続けているそうだ。中川さんの思いは、部外者同士の戦争によって島民を死なせてはいけないという思いだけだった。こんな風な命の守り方もあるのだと思った。

・私はこれまで母から個人的に太平洋戦争についていろいろな話を聞かされていたが、正直あまり興味がなかった。今回、太平洋戦争中の人々の心情などを学び、意外と今と思いが変わらないことがわかった。「お国のために命を捧げる」と言っても、本当は死にたくないし、怖かったんだということも知った。これからは母の話をもう少し聞いたり一緒に考えたりしたいと思った。

・枝幹二氏の手帳が心に残る。家族への感謝の気持ち。今まさに戦場で死ぬ身であっても、生まれてからこれまで生きてこられたことの意味を理解している。そして枝氏の友人の末永氏も、枝氏をよく知っているからこそ、枝氏のご遺族へ心をこめて遺書に手紙を添えている。枝氏の親の心を和らげようと、文章を作っている。戦争末期の苦しい状況であっても、自分のことではなく他人を優先する心のすばらしさに感激した。

・活字ではなく手書きで書かれた遺書を見たことが印象深い。戦争で多くの尊い命が失われてしまったというのは知識では知っていたが、枝幹二氏の遺書のようにこんなに具体的なものは初めて見た。内容ももちろん印象深かったが、一番注目したのは、字の乱れやペンの色である。これは内容をパソコンで打ったものを読んででもわからない。いい意味で、生々しい記録だった。直筆を見ると、枝氏の強い思い、心の揺れなどが手に取るようにわかった。手書きの持つ力の強さを実感した。

・特攻隊の方々には、死の宣告を受けた人々だ。書き残したいことがたくさんあったろうに、手紙は検閲される。最後のごちそうとして配給された缶詰や清酒を食べたいのをがまんして、家族に送った人もいる。その人たちはきまって、手紙や遺書に、自分の情けなさ・無礼をわび、家族への愛・心配をこめていた。自分が死ぬそのときまで、家族や大切な人を思っているのはすごい。戦時下の人々が、どんな過酷な状況にあっても大切な人のことを思っている様子、何かを残そうとしている気持ちに自分を重ねたりして、生きる力をもらいました。

・戦争は家族をばらばらにする。家族が離れ離れになってしまい、そのまま生き別れになる場面も多かった。だから、家族と過ごす時間を大切にしなければならないということに気づいた。

・『大人になれなかった弟たちに…』の中で、お母さんが「ヒロユキは幸せだった。」と言います。はじめは何が幸せなのかわかりませんでした。ひとりぼっちではなく家族に看取られて死ねて幸せだ、ということに、その時代の苦しさがわかります。わたしはこの平和な世の中で「平和ボケしちゃだめだな。家族に看取られて死ねるこの世の中を守り続けなければ。」と思いました。

⑧「言葉の力」について

・言葉は一見、何ともなさそうで、すごく大きな力を持っていることが分かりました。言葉で誰かを助けたり幸せにしたりできる反面、言葉で誰かを殺したり傷つけたりできるということを知りました。私はこの大きな言葉の力を良い方向に使っていきたいと思います。当たり前といえば当たりのことですが、気がつくと結構酷い言葉を皆平気で使っています。良いほうに使えば皆が幸せになれるのなら、少し大変でも、注意して言葉を使っていきたいです。

・言葉は人間が自分の「思い」を伝える唯一の手段だ。人は落ち込んだとき、歌や詩、ドラマに触れる。それはその中の言葉に心のよりどころを見出しているからだ。言葉は使い方ひとつだ。この威力を意識して、注意して使っていきたい。

・私が一番記憶に残っているのは、「言霊信仰」だ。昔の人々は、医療技術が発展しておらず、知識もないし戦いもあるから、今よりも死と向かい合う機会が多かっただろう。だから神様や言葉の力にすがったのだと思う。単なる語呂合わせという軽い気持ちではなかったのだ。日本人には今も生まれつき言霊信仰が根付いている。このような、日本人の「思い」である言葉のパワーを、これからも守っていきたいと思う。そして、普段から自分の言葉に気を配ろうと思った。

・これまで言葉の力を学習してきたが、これほど効果があってこれほど伝えやすいものはないと思った。口からでも手からでも、正直な思いは理解しあう者同士だからこそ、よく伝わるし、その人の人生を変える力さえあるということがわかった。

・平教経に心ひかれる。人は命の危機に面した時などに特に、発した言葉には魂がこもる。その言葉は後世に語り継がれるほど、人の心をつかむ言葉になるのだ。教経の言葉で、それが実感できた。

・末期がんの天野さんは、「副作用で体力を消耗してベッドの上で命を1年、2年と延ばすのが自分の生き方かと考えたとき、それは僕の生き方じゃないと思った。」と述べた。この言葉に「生きる」を感じた。自分のしたいことをして、自分を生きる。重い病気になっても自分の信じる道を生きていて、その言葉に「あっ。」と、何か世界が変わった。そして私も「自分」を生きたいと強く思った。天野さんはもう亡くなったが、彼のあの言葉は私を動かす力がある。真の言葉には人を動かす力がある。

◎「つなげて考える」ことについて

・戦争は、勝ったほうも負けたほうも、必ず誰かが嫌な悲しい思いをすることがわかりました。昔と今では、戦いのルールや状況、生きること・死ぬことについての考え方は異なる（昔は死にざまを重んじた。現在は生きかたを大切にす。）けれど、自分の大切な人が亡くなるというのは、いつだって辛いことだというのがよくわかりました。

・大切な人を守るために、自分は嫌われてでも相手を逃がす。相手に悲しい思いをさせないために、自分をわざと嫌わせるというのは、本当に「粹（いき）」だと思う。木曾義仲も、ペリリュー島の中川隊長も、共通点があった。今も昔も、人の心は変わらないことがわかった。

・今と昔では、人々の考えは全く違うし、戦の中の人々の感情は今の私たちとはかけ離れているから、理解不能だと思っていた。しかし平家物語や太平洋戦争下の人々の思いを読み、戦の中の人々は、死に対する恐怖や、愛する人への思いになんの違和もないということがわかった。今回の学習ではたくさんの文章を読んだが、一見違うように見える内容でも、実は通じる点があることがわかった。それが今回の収穫である。今後の学習では、「いくつかのことに通じる点」を見つけながら学んでいきたい。

・ダメダメな平宗盛とそれ以外の武将たちをつなげて考えることにより、引き立て役という宗盛の役割が見えてくる。昔は死に急ぎ、今は生き急ぐ。これらも両者をつなげて対比してみると、違いが鮮明になる。このように、つないで考えてみることによって、ずいぶん視野が広がった。

・宗盛は戦では活躍できなかったが、物語の構成では大活躍であった。一回落ちることでその後をよい印象にもっていくことができる。これはまるで『走れメロス』の心情曲線だ。こんなふうに考えることも、「つなげる」ことなのだろう。

・昔と今、あるいはジャンルの違う文章を重ねたり対比したりしながら読んでいくことにより、考えるきっかけを持ったり、共感したりすることが多くなった。自分はこう思うのに、なぜこういうふうに登場人物・作者は思うのか、と、一つひとつの言葉を見つめるきっかけともなった。

◎全体を通しての、単元学習を終えての感想・疑問・意見など

・今回の学習で改めて命について見つめ直し、私たちが普段使っている言葉について深く考えることにより私は、人としてすごく大切なことを学べたような気がします。今までたくさん使ってきたのに、言葉の怖さについて全く考えていなかったことが、すごく衝撃的でした。今回の学習はこれからも思い出せるようにしておきたい。すごくためになったので、ありがとうございます。

・平家物語では、武士として人としてすばらしいことをした人がいれば、たとえ敵でも人はたたえる。そういう文化はいいなと思った。人の真心は今も昔も変わらないのだが、今の人は現代のストレス社会によって汚れてしまっていて、平家物語の人物のように素直に敵をたたえることができないのは、悲しいと思った。

・こんなに命について深く考え、向き合ったことはなかったし、多分これから先もそうあるものではないと思う。命が一番身近だからこそあまり正面から向き合えていなかった。今回このような学習ができてよかった。

・古典に対する自分の悪い先入観がなくなり、興味が高まった。

・今回作った副読本は、普段の教科書には出てこない文章が多かった。だから一つのテーマでさまざまな切り口からリンクさせて文章を読むことができた。今回の学習は総合的に、自分の人生をどう考えるのかということのように思えた。自分の人生を見直す機会を作り、これからどう生きるかを考えるきっかけにもつながった。

・とても重たいテーマだが、僕たちが生きていくうえで大事なテーマでもある。自分の命を無駄にしてしまう人が多いこの時代に学び、命の大切さを改めて実感できたので、よかった。ただ、昔の武士が生きざまよりも死にざまに重点を置いていたわけが疑問に残る。もちろん、戦いの中に身を置いているため、すぐ死んでしまうから、永遠に語り継がれることで永遠の命を得ようとするのはわかっているのだが、それでももっと生きざまに重点をかけてもよいのに、と思う。

・「生きる」「命」これらのテーマは今までの学習よりもスケールが大きく、あまり身近に感じなかった。しかしよく考えると、「身近ではない」のではなく、自分が「回避していた」のだ。今回、昔の戦、現代の戦争をしてきた先人たちの声がぼくに伝わった気がする。これらの人は死を大切にしていたが、結局は生きていないと死を大切にすることもできない。やはり、一つしかない命は大切にすべきであることを、痛感した。

6 単元学習全体をとおしての、成果と課題

6.1 成果

戦争に関して表面的・短絡的な考えで思考停止するのではなく、人々が生きること・表現することを制限された中でもいかに生きて、言葉をつむいでいったか、を見ていこうとする姿勢が生まれた。そして、言葉が持つ力も実感できた。この姿勢は、古典に対しても、現代文学に接するのと同じような態度で臨めるようになった。戦は兵士のみならず、女性も子どもも巻き込まれるということを実感し、戦についてより深く考えるようになった。

有限である命を実感したことから、自分のこれからの生き方を考えるようになった者もいれば、言葉の持つ強さ・こわさを実感して言葉の使い方を再認識した者もいる。たくさんの教材を導入したことにより、それぞれの学習者がそれぞれの切り口で考えを深めることができた。

また、グループ活動や「さりはか一ど」の多用により、学習集団の構成メンバー1人ひとりの考えをお互いがよく知ることができ、相互交流が深まった。教師が意見交流の「仕掛け」を作り、学習者の意欲を高め、反応をとらえて価値づけたうえでまた提供するという必要性を、改めて再認識した。互いを支え、認めあう姿勢も育っていった。

6.2 課題

多教材を扱うということは、比較ができて1つひとつの教材の特徴が際立ったり複数の視点が持てたりする反面、それぞれの教材の扱いは軽くなる。結果として読みのおさえが弱いところもあった。

ご指導をいただいた石井正己先生からは、昨年、教材が「死」を見つめる方に偏っているので、もっと「生」の方の教材も考えるようにとアドバイスをいただき、昨年度は選択制にしていた文章を今年度は必修の教材に変更したのもあった。それでも結果として「死」と真正面から向き合う教材が多くなってしまった。それは、今も昔も、戦時下の人々が死と直面する毎日であったからである。教材の選定については、まだ改善の余地はあろう。

7 終わりに

2年間をかけて、「特攻隊員の遺書」を教材化させていただいた。遺書は「命を見つめる」と言う点では究極の文章である。繰り返し述べるが、教材開発した「特攻隊員の遺書」を、私は何ら思想教育の対象としては考えていない。自分の死と向かい合ったとき、人は何を考え、どんなことばを残すのか。共に戦争未体験者として複数の遺書・日記・手紙を学習者と共に読み、検閲をかいくぐってでもにじませた思いや純粋な心を読み取らせたかった。死を想うことは生を想うことにもつながる。最後の「生」のことばの美しさを共に味わうことで、学習者が今を、そして将来をどのように生きるのか、真剣に考えてほしかった。

『平家物語』においても、戦の中で1人ひとりが真剣に命を見つめている。現代文とは異なる描写だけでなく、つい読み飛ばしてしまいがちだが、登場人物の思いを丁寧にイメージさせていけば、昔の人も現代の人も、同じように一生懸命生きようと努力している様子がわかる。もし自分にはこれ以上の命がないのなら、次の世代や周りの人にどうやって思いを託すかまでも、真剣に考えている。

こうした教材を扱いながら、私は次のような願いを持っていた。

文中にある「死を意識して生きること、充実した人生を歩むことができる」「人は誰でも『自分の役割』を持って生きている」などの言葉を、自分の生活・人生の中でもつなげて考えてほしい。また、たくさんの文章にふれることで、さまざまな日本語の姿にふれ、日本語の多様性と深さへの興味を持たせていきたい。

こうした私の願いは、大なり小なり、学習者の心に届いたようである。今回の学習はこれで終わるのではない。学習者自身がこれからの人生設計を立て、実際に人生を積み重ねていくさいに、またこのことばにたちかえり、改めてことばの意味を実感できるような、長期的展望に立った指導を行っていく必要がある。

今も昔も戦時下の人から学ぶものは多かった。充実した2年間だった。お世話になった皆様、心から感謝申し上げたい。

【参考文献】

- ・「さりはカード」について：拙稿 座席表型自己評価表（さりはカード）がもたらす学び合いの力（東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要第44号 2008年 p.111～p.120 松原洋子）
- ・戦争と向き合うことで命を見つめ、伝える言葉の力を実感し合う学習指導～さまざまな較べ読みを通して（中学3年）～
（東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要第51号 2015年 p.209～p.224 松原洋子）
- ・戦（いくさ）と向かい合う〔その1〕～兵士の遺書を読み解くことで命を見つめ、伝える言葉の力を
実感しあう、教材の開発～
（東京学芸大学附属小金井中学校研究紀要第52号 2016年 p.165～p.176 松原洋子）